

慢性期重症脳外傷患者の理学療法 - 整形外科的手術の適応について -

Physical therapy for the chronic stage patients with severe traumatic brain injury-Result of orthopaedic surgery for the lower extremity -

萩原 千春、小林 球記、石川 里香、岡 信男、河野 守正

自動車事故対策機構 千葉療護センター

Chiharu Hagiwara, Tamaki Kobayashi, Rika Ishikawa, Nobuo Oka, Morimasa Kouno

Chiba Ryougo Center, Chiba, Japan

【はじめに】慢性期重症脳外傷患者に対して行なった整形外科的手術の結果と意義について検討した。【対象】自動車事故による重症脳外傷で長期経過し、下肢変形のために座位訓練に支障があり、患者本人・家族に手術の了解が得られ、訓練時簡単な指示に応じる事ができる患者4名（男性2名・女性2名）。入院時の年齢18～24歳、受傷から入院までの経過期間は9～31ヶ月、入院期間は24～40ヶ月、足部術後の入院期間は6～14ヶ月。手術は他施設で実施し、術後約2ヶ月で帰院。【手術の目的】立位・歩行目的ではなく、座位の安定を目指して足底での体重負荷を可能にすること。【結果】1、全症例とも、座位・立位保持訓練が可能になった。2、座位姿勢が安定し、上肢の実用性が改善して、車椅子操作の自立や着替えなどの介助量が軽減した。3、下肢変形の改善により既製サイズの子椅子が使用できるようになった。4、介助者1人でトランスファーが可能になったことで患者の生活行動範囲が広がった。5、FIMでは、運動項目の移乗や認知項目の改善がみられた。6、3症例は現在、在宅生活をしているが、家族も手術に対して『受けてよかった』と評価している。【考察】手術実施施設との連携によって術後一貫した訓練内容を継続できたことは、患者・家族が退院後の生活を考える一助になった。立位・歩行を理学療法のゴールにできない重度な患者の場合でも下肢の変形が改善されることで、わずかなADLの向上と、今後の生活のために介護量の軽減が図れたことは意義があると考えられる。